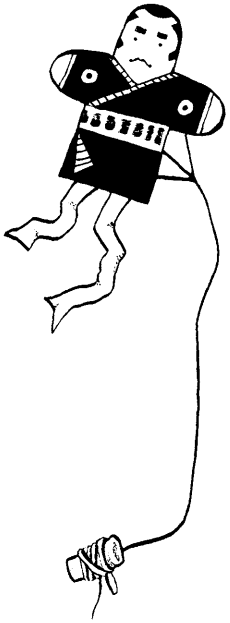
M先生とKちゃんのこと

佐木　みどり



はじめに

私が幼児教育に携わり始めて約二十年が過ぎました。

幼児教育を始めた頃は、保育者として子どもだけを見つめ、子どもについてだけ考えていた数年でしたが、後の十数年は、保育者を育てることを考えてきたように思います。

今の私は、子どもの育ちや姿を見ながら、その子にかかわる保育者を見ています。保育者が子どものことで困ったり悩んだりしている時に保育者と一緒

に考え、保育者が気にしている子どもを観ながらも、その保育者の様子もまた観ている自分に気が付かされます。

Kちゃんのこと

三年保育年少児を担任しているM先生の悩みは、Kちゃんのことでした。

Kちゃんは、祖父、両親、妹がいる三月生まれの三歳の男児です。入園した当初は当園をいやがることもなく比較的順調な様子でした。しかし、側にいて遊んでいる他の子どもを急にひっかいたり、たたいたり、おもちゃを取り上げてしまったりする姿が見られました。そして、何かが気に入らないと隠れてしまうのです。隠れ方も中途半端ではないのです。最初の頃はKちゃんがいなくなると、一人で家に帰ってしまったのかとか、フェンスをよじ登って川に落ちたのではないかとか（園の前に四メートルぐらいの川があります）、全職員で必死に探したこともありました。その時は、倉庫の中の棚の陰に隠れていたのです。見付けた時は本当にホッとしました。見付けられたKちゃんが、嬉しそうにニコニコしていたのが印象的でした。それからは一か月に一度程度十月頃まで、Kちゃんのかくれんぼが続きました。大人が考えも付かない遊戯室のカーテンとカーテンの間、お手拭きタオル掛けのタオルの中に、小さくまるくうずくまっているKちゃんを見付けるのは、なかなか簡単にはいきませんでした。最初のように川に落ちたとか、園外に出ていってしまったとかいうような心配はしなくなりましたが、やはり必死で探し回ることが数回重なりました。そして、もう一方で、Kちゃんの乱暴な行動は治まることなくエスカレートしていくように見えました。

先生達は、「Kちゃんは隠れるから困った」「どうしたら、お友達に手を出さないようになるのだろ

うか？」「Kちゃんは、……」「Kちゃんは……」と、その行動の現象面だけでKちゃんをとらえた言葉が聞かれるようになっていきました。

M先生のこと

Kちゃんのことで、一番困っていたのは担任保育者のM先生でした。Kちゃんが手を出した子どものお母さんから苦情が出たり、M先生がみんなに絵本を読んでいる時に邪魔をしたり、おもちゃを壊したりするKちゃんにM先生はほとほと手を焼いていました。「彼が休むとクラスが落ち着くんです」と何気なく言ったM先生の言葉が耳に残っています。

短大を卒業して本園に就職して二年目のM先生にとって、Kちゃんはどうしたらよいのか分からない子でした。

M先生が捉えたKちゃんの姿は、その当時のM先生の四月二十日の記録で読み取ることが出来ます。

元気に挨拶し登園してくる。すぐにタオルを掛ける。そして、すぐ近くにいたM夫をたたきはじめる。

次に、だいち組の保育室（隣のクラス）に入る。男児が積み木を積んでいるところに行って、一緒に積み始める。男児の方は、K夫が来たことは気にしないで一緒に積んでいる。しかし、K夫は急に積み木を男児の方に倒す。

この記録はKちゃんの行動の経過説明に終わっています。M先生が、Kちゃんの行動を気にしているのが分かりますが、ここには、Kちゃんの表情や場の状況、男児がKちゃんにどのようにかかわったかというところまでM先生の関心が向いていません。Kちゃんだけがスポットライトで浮かび上がったように、その行動のみに関心がいっています。

Kちゃんの本当の姿が見えているのか不安が残りました。しかし、このことは幼稚園の先生になって二年目の先生であればよくあることです。

みんなで話し合うこと

私は、先生達が気にしている子を一緒に考えるために四年程前からビデオ撮影をしています。一週間に一日だけ一人の子どもを、その時の状況と遊びや行動の様子と流れ、人とのかかわりなどによって三十分位～百二十分位の幅で撮影し、撮影後簡単なフィールドノートを付けています。

このビデオを先生達と一緒に見ながら、話し合いの時を持ちます。

Kちゃんのビデオも撮りました。そして、十月十四日のビデオについては、M先生と二人で見て話し合いをし、その後で全保育者でみて話し合うことをしました。ビデオの内容は大体次の通りです。

保育室の外にいるM先生の「お片づけだよ」という呼びかけでひかり組（Kちゃんはひかり組です）の保育室にいたKちゃんもお片づけを始める。時々M先生の方をちらちらと見ながら彼なりに一生懸命片づけをしている。

保育室の中は乱雑に散らかっており、ままごとのおもちゃも畳の上に落ちている。その時知らずにKちゃんはままごと用のお茶碗を踏んで割ってしまった。Kちゃんはしまったというような表情

をしながらその場に立ちつくし壊れたお茶碗を見ていると、そこにM先生が通りがかり、「何で割ったの、ちゃんと下を向いて歩かなくてはいけないじゃないの」とKちゃんがわざとやったというようなニュアンスで言う。周りの子ども達も「Kちゃんがやった」と口々に言う。

このビデオ撮影後三十分位して、M先生が「Kちゃんがいません」と職員室に飛び込んで来ました。フリーの保育者と一緒に探し回りながら、以前お手拭き掛けの中にすくんでいたことを思い出して行ってみるとやはりそこに隠れていました。見付けられた後もKちゃんは保育室に帰るのをいやがり職員室に少しの間いて、遊んでいました。

M先生とこの日の保育後に撮ったビデオを一緒に見ました。M先生は、お茶碗を割ったその前のKちゃんの様子を見て、意外そうに「わざとじゃなかったんだ」と言い、随分苦しそうな表情をしていました。私も、ビデオを撮りながらその場でM先生に説明しなかったことがよいことだったのか、考えさせられました。後日、全保育者でこのビデオを見ながら話し合ったときに、M先生の言葉の中に「Kちゃんはあのときどんな思いだったのか」とか、「私が決めつけて接したから、Kちゃんは隠れたのかもしれない」というように、Kちゃんの行動だけでなく内面を読み取ろうとする意志が見えてきました。M先生は、茶碗を割ったKちゃんを決めつけて接した自分を反省する中で、決めつけた自分と、決めつけられたKちゃんの気持ちを振り返り、Kちゃんの内面を見つめていなかった自分に気が付いていったのでしょう。

他の保育者達も困ったKちゃんではなく、「先生の方をちらちら見て片付けているのはM先生に褒められたい気持があるんだね。可愛い所あるね」「他の子

にあんな嬉しそうな顔して話しかけてる。誰かと遊びたいけど、どのようにかかわったらよいのか分からないのだと思う」「Kちゃんって車で遊ぶのが好きなんだね。Kちゃんの遊びたい遊びをもっと認めてやるといいのかもしれない」などという声が聞けました。その場の雰囲気は困ったKちゃんをどうするのかではなく、ビデオで観た自分の知らないKちゃんに驚き、いろいろな姿のKちゃんについて話し合い、その思いを推し量るというようなものでした。

まとめ

Kちゃんは、十一月頃から隠れることをしなくなっていきました。そして、徐々に他の子どもをひっかいたり、かみついたりすることもなくなり、他の子ども達もKちゃんを、乱暴な子と決めつけることが少なくなっていきました。

Kちゃんの問題を、「こうすればいいのよ」「このことはこうなのよ」と、私や他の先輩の保育者が言ったとしても、M先生が言葉の上では分かったつもりになったとしても、問題は解決されなかったと思います。Kちゃんのことをみんなで話し合い、共に考え、M先生の悩みに共鳴していったことで、M先生は自分を振り返り、Kちゃんの行動だけでなく内面をみつめることの大切さに気付くことができたのです。そして、Kちゃんへのかかわり方を変えていったことで、Kちゃんの姿が変わっていったのでしょう。

このエピソードから、保育者の具体的な問題を一緒に考え、寄り添う保育者集団の在り様で、保育者が自分自身で問題を解決したり、自分の今の保育の枠組みをはずしたりするきっかけになるということと、保育者が変われば、子どもも変わっていくということを改めて確認することができました。

（岐阜県　学校法人佐木学園　揖斐（いび）幼稚園）